

目標は全国大会で勝ち上がり、 国立劇場の舞台に立つこと



1

① 日本で最も古い民謡と言われる「こきりこ」を東京・国立劇場で踊る。全国高等学校総合文化祭の優秀校だけに与えられる晴れの舞台。

② 平家落人伝説を結び付けて伝承されてきた「麦屋節」。全国大会に向けての演目選び、そして練習内容も極力生徒主体で考えることで、生徒の中に主体性が芽生え、練習も活性化。

③ 2014年度の全国高等学校総合文化祭の郷土芸能部門には、全国から52チーム、1300人の高校生が参加。南砺平高校は文部科学大臣賞・最優秀賞を獲得し、頂点に立った（円内は最終発表を待つ生徒）。



2



3



ハートを
こがせ!

Vol.01

富山県立南砺平高校
郷土芸能部

全校生徒100人の
小さな高校だけれど、
目指すのは常に日本一

部員の心が1つになった時
観る者の心を震わせる演技が出来る

富山県立南砺平高校は、日本最古の民謡と言われる「こきりこ」や、平家の落人伝説に基づいた「麦屋節」など多くの民謡が残される越中・五箇山地域にある。同校の郷土芸能部は、全国高等学校総合文化祭に1994年から21年連続で参加し、最優秀賞2回を含む15

回入賞、優秀校東京公演10回出演を誇る。全校生徒の約半数の48人が部員だが、生徒数の少ない同校では、専部は他部の存続にかかわるため、全員が運動部や文化部との兼部だ。小さな強豪校の部員たちのハートには、どんな炎が燃えているのだろうか。

勉強と2つの部活の
両立は大変だけれど
続ける理由がある



4



5



6

④ 地域から十数人の指導者がボランティアで参加。学校と連携し、「五箇山民謡の伝承、人間形成、伝統文化や郷土を愛し心豊かに生きる生徒の育成」など指導方針を共有する。

⑤ 練習時間は兼部している部活動終了後の19時～21時頃。1学期中は全国大会に向けて、2学期以降は全国公演のため、連日のように練習が続く。

⑥ 練習では、生徒同士が話し合う時間を大切にしている。生徒に考えさせることで責任感が高まり、緊張感のある練習につながる。

ハートを
こがせ!

Vol.01

富山県立南砺平高校
郷土芸能部

心を入れた舞台は 自分の頭で考え、 取り組んだ練習の成果

どんな気持ちで練習に来たかは
挨拶に表れる

2014年全国高等学校総合文化祭で8年ぶり2度目の最優秀賞を受賞した富山県立南砺平高校郷土芸能部。日々の練習で目指すのは、立方(踊りの担当)と地方(伴奏音楽や唄の担当)が一体となった舞台だ。しかし、踊りや演奏が型通りに出来るようになることと、観る者に感動を与える

富山県立南砺平高校
高田葉月 たかた・はつき
3年生。郷土芸能部部長。卒業後は、大学に進学し、観光学を学ぶ。

富山県立南砺平高校
荒井絢香 あらい・あやか
3年生。地方パートリーダー。卒業後は、大学に進学し、経営学を学ぶ。

演技に到達することは全く別物だ。

「踊りと演奏が一体になるととても気持ちが良いけれど、実際はなかなか合いません。どうすればうまくいくのか、いつも悩みます」(高田葉月さん)
地方のパートリーダーを務める荒井絢香さんは「練習量と同じくらい、演技に取り組む気持ちが大事だ」と考えている。

「踊りと演奏が一体になるかどうかは、気持ちの部分によるところが大きいと思います。普段の練習でも、全国大会で賞を取りたいと強く思っている人は一生懸命だけれど、本番はまだ先だと思っている人は真剣さが足りないんです」(荒井さん)
どんな気持ちでその場に来て、演技に臨んでいるかは、挨拶の仕方、楽器や衣装の扱い方からよく伝わってくるという。

「心を入れて挨拶が出来ない人は、その日の練習も大切に出来ない」と私は思います。そこで、挨拶の指導も生徒同士でするのですが、声の大き



教師の
思い

技術とは別の
必死さを共有した時
感動が生まれる



富山県立南砺平高校
谷崎孝志 たにざき・たかし
教職歴32年。同校に赴任して10年目。
1学年主任。数学科。郷土芸能部顧問。

心と演技のつながりに
早く気付くことが大切

演奏、唄、踊りが一体となった演技を前にした時は、あまりの感動で涙が出てきます。しかし、そのような演技をすることは決して簡単ではなく、全国大会の直前くらいになってようやく目にする事が出来るかどうかです。技術面とは別の一生懸命さ、必死さを全員が共有できてはじめて、そのレベルに達するのだと私は思います。高いレベルを目指すほど、言葉で説明できないものを突き詰める強さが必要だと言えます。
練習での挨拶の仕方、衣装や楽器の整理整頓の状態などは、演技の出来に確実に表れます。どんな気持ちでその場に来て、演技に臨んでいるかは、見ている人に伝わるのでしょうか。「演技の時だけちゃんとすれば

*プロフィールは2015年3月時点のものです



「全国大会で勝ち抜き、国立劇場に行こう！」を合い言葉に、高い目標を掲げて全力で頑張る生徒たち。郷土芸能部に憧れて、遠方から同校に通う生徒も多い。

さは注意できても、心が込められているかどうかまでを注意するのは難しいです。結局、一人ひとりに自分で気付いてもらうしかありません。だから、せめて私は率先して、心を込めた挨拶をしようとい心掛けていました」（高田さん）

目標を掲げ、主体的に練習するから 私たちは強くなった

全国各地から公演に招かれる郷土芸能部だが、週末などに公演が続くと、モチベーションは高まる一方で、「もっとじっくり練習したい」という声も部員から上がってくる。

「目先の公演のためではなく、全国大会を見通

した練習を重視した方がよいのではないかと部で話し合ったこともあります。確かに、全国大会で最優秀賞を取るのは私たちの一番の目標だけれど、公演を通して全国の人たちに地元の民謡の素晴らしさを知ってもらうのも、部の大切な目標です。だから、全国のお客さんの笑顔を見られることを喜びにして頑張ろうと思いました」（高田さん）

高校3年間で一番頑張ったことは、郷土芸能部の活動だったと高田さん、荒井さんは振り返る。

「息が合わず、練習中に衝突したこともありましたが、みんなで話し合いながら目標に向かって練習することの楽しさや難しさを学びました。また、パートリーダーの経験から、何事も自分が率先してやらないと周りについてこないことにも気が付きました。勉強も、後輩の見本になりたいと自分なりに一生懸命やったつもりです」（荒井さん）

「自分は努力できる人間だということ、そしてこの先、勉強も仕事も自分はやれば出来るんだということを部活動から学びました」（高田さん）

民謡の里の小さな学校が、全国屈指の強豪校であり続けるのはなぜか。高田さん、荒井さんは「部員が主体的であること」を理由に挙げる。

「郷土芸能部は、全国大会で優秀賞を取るという目標を全員が共有しているから、自分で課題を決めて、練習を頑張れるんだと思います」（高田さん）

「指導者の方の言葉を待つだけでなく、自分で考え、自分で直していくからこそ、高いレベルの練習が出来るのだと思います」（荒井さん）

いい」という考えは間違っていると、どれだけ早く気付けるかが重要なのです。

一流の舞台に立つことで 生徒は本物に変わる

最近では、少子化の影響で民謡を知る地元の生徒が少なくなり、高校入学後初めて民謡に触れる生徒が増えています。練習はしているのだけれど、型通りで勢いがなく、心に訴えるものがないと感じることも正直増えています。それでも、全国大会で勝ち進み、国立劇場の舞台に立つと生徒は大きく変わります。会場の緊張感、そして一流のスタッフを前にして、生徒は本物になり、そこからは練習への取り組みも一変します。地元の指導者の方も「国立の舞台を踏まんなんあかんがじゃ」と一流の舞台を経験することの大切さを説かれています。

富山県立南砺平高校

◎ 近くには世界文化遺産の合掌集落があり、地域に根差し、伝統文化を脈々と受け継ぐ。郷土芸能部の他、スキー部などの運動部も全国大会に出場。小学校・中学校・高校合同の運動会、マラソン大会、百人一首大会など、学校行事も盛ん。

◎ 設立 1950（昭和25）年

◎ 形態 全日制／普通科／共学

◎ 生徒数 1学年約35人

◎ 2014年度入試合格実績（現役のみ）

4年制大は、富山大、中央大、日本大、早稲田大、関西学院大、同志社女子大などに10人が合格。短大、専門学校19人、就職5人。

◎ URL <http://taira-h.ac.tytm.ed.jp/>